

私達の思考の前提すらも揺り動かす、 「他者」との濃密な対話。

REVIEW

第3回「アジアダンス会議」
2007年2月6日～12日 森下スタジオ

ユネスコの下部組織である国際演劇協会・日本センターが隔年で開催してきた「アジアダンス会議」、その三回目が東京で開かれた。アジア各地から集まった振付家、批評家、オーガナイザーなど14人の参加者が一週間カンヅメになり、プレゼンテーションや討論、ワークショップを行いながら、ダンスを通してアジアを、あるいはアジアを通してダンスを、じっくり考えてみたのである。

今回のファシリテーターを務めた筆者は、この会議を、既存の世界秩序に基づく情報交換や報告ではなく、多様な個人々の身体を互いに反射させ、それぞれのダンス観が批評に晒され合うような政治的実験の場にしたいと考えた。そこで、既に明確なスタイルを確立した振付家や、権威のある研究者などより、むしろこれからアジアのダンスを動かしていく若い世代、あるいは新しい視点で何かを探求している人々に集まってもらった。タイからは振付家ピチュ・クランチェン。インドネシアからは振付家のジェコ・シオンポ、アーツマネージャーのヘリー・ミナルティ。シンガポールからは振付家のジョヴィアン・ン、オーガナイザー／批評家のタン・フクワン。マレーシアの研究者／振付家のズルキフリ・モハマド。日本からは、振付家新鋪美佳（ほうほう堂）、常楽泰（身体表現サークル）、鈴木ユキオ（金魚）、手塚夏子。そして「吾妻橋ダンスクロッシング」の桜井圭介、

NPO「コミュニティアート・ふなばし」の下山浩一。研究者／批評家として古後奈緒子および筆者。

結果として、鋭い疑問や意見を率直にぶつけ合いつつ、誰もが自身のポジショナリティを意識せざるを得なくなる刺激的な一週間になった。予想を超えた指摘、発見、考察がいくつも生まれ、ダンスをめぐる思考の可能性が大きく広がった。その全容については刊行されたばかりの記録集をぜひ読んで頂きたいのだが*、一つだけ紹介すると、例えば日本のコンテンポラリーダンスの特徴である「日常の身体」ということについて。会議でもよく話題に上がったが、一見するとこれは60年代のジャドソン教会派の行ったことと非常に近い。しかしそもそも「日常」の生活なるものが場所や時代によって異なるという（当然の）前提に立って見たらどうだろう？

日本の大都市の小スペースで踊っている新鋪美佳のダンスは、動きを舞台向けに誇張することなく、微かな指先の感触にまで渡る繊細な皮膚感覚を大事にして作られている。それを、豊かな自然のジャングルが残るパプア出身のジェコ・シオンポが最初に見た時、「どこがダンスなの？」と言った。ジェコのダンスは強烈にハイテンションで、必ずしも派手ではないが唐突かつ鋭い動きの連続であり、その延長上にヒップホップの要素を取り入れたりもしている。違いは明白だ。ところがセッションを重ねる内に意外な事実が見えてきた。

ジェコもまた、パプアでの「日常の動作（daily movement, pedestrian movement）」を素材にしているというのである。彼の説明では、パプアの人々は椅子に座る時も、道で知合いに声をかける時も、速くてリズムカルな、どこか遊戯的ともいえる身振りを見せるらしい。つまり二人はそれぞれの環境で日常的な感覚のリアリティに根差した「等身大」かつ「自然体」のダンスを作っていた、というわけなのだ。こうして「日常の身体」というキーワードを軸にしつつ、従来の欧米中心の史観とは別のマトリックスを描く可能性が見えてくる。あるいは、ダンスを考えることを通じて我々の頭の中の世界地図が書き換わるとさえ、いえるかも知れない。

思考の枠組の変動は、思考する当事者の身体を巻き込み、揺り動かす。だから筆者個人としては、今回「アジア」よりむしろ「日本」についてずっと考えていた。遠くからアジアを眺め、語るのではなく、自分の身を開き、かっさばいて、つながりを見つけ出すような作業を通じて、アジアも日本も解体して再構築することができるのではないかと。そしてそれはコンテンポラリーダンスを、今以上に刺激的で強い「言葉」にしていきたいのではないか。そんなヴィジョンが、この会議を通じて具体的に見えてきたように思う。

（武藤大祐／ダンス批評）

*「第三回アジアダンス会議」の全容を収めた記録集は、一部1,000円にて発売中！ 問合せ：国際演劇協会 (ITI/UNESCO) 日本センター (03-3478-2189 または iti@topaz.dti.ne.jp)。世田谷パブリックシアター・ブックススペースでも販売しています。

写真…右より自らのダンスを語るのジェコ・シオンポ、ピチュ・クランチェンによるワークショップ風景、最終セッションの様子。



（前ページより）それは監視カメラで終始、使う側を監視していることからも分かるでしょう。私たちはそんなに監視されなければならないのでしょうか。お許しを得なければ、してはいけないのでしょうか。

このままでは劇場に、管理された安定したものしかなくなってしまうでしょう。

今の劇場のあり方は、依然として、役人自身の権益を守るための劇場運営であって、いいものを創り出すなどと考えているわけではありませんし、理念もありません。劇場運営はいいものを創ろうとすることが先にあり、その後規則などがあるべきです。僕は、海外、特に西欧の劇場にお世話になる機会が多いのですが、たいがい運営している人たちはとても協力的で、どうしたら僕たちのやりたいことをその劇場機構の中で出来るかを考えてくれて、そのために苦勞をしてくれます。それは日本の公共劇場とは雲泥の差があります。日本の公共劇場を時折利用すると、全て管理するという態度で接してきます。自分たちは規則を守ることだけが仕事であって、その規則違反を注意し行為をさせなくすることを劇場運営だと思っているようです。何をすべきかがまったく分かっていない態度で、規則以外のことを考えようとしません。その態度は、範囲を超えるものは「危険分子」とみなす、という考え方でしかありません。あるのは、もし、そこで危険なことなどが起きたら、自分達自身が責任を取らなければならないようになってしまおうという保身体制だけです。それが、

今の日本のシステムだからです。事なかれ主義は、劇場現場まで同じなのです。

もう進行してしまっている劇場計画なり、既に作ってしまったものは止めることはできないかもしれません。ただ、民間を圧迫するのは止めて欲しいのです。貸し劇場方式は止めて、1ヶ月に1本の作品しかやらないとか…。1週間の公演でも、3週間くらいは立て込んで稽古をしてよりいい作品創りをしてみるとか、リスクを背負うかもしれないロングラン（普通の劇団はなかなか出来ない）をしてロングラン体制を確立でき得るかを試みるとか…。ロングラン公演することで得ることも多いはずだからです。僕たちの公演を招聘してくれたシカゴの劇場では、3週間の劇場リハーサルをさせてくれて1週間の公演を行うというものでした。それは勿論、使わせてもらう側にとってとてもありがたい条件ですし、他の民間の劇場とも経営的に競合しなくていいものだったように思います。国や州から援助をもらっていたNYの民間劇場も、他の民間劇場を圧迫しないためにそのような運営を心がけていました。日本国内の民間劇場も国から援助されているところもありますが、数は少なく、やはり運営は他の民営の劇場を圧迫するようになっていくのが現状です。

日本では指定管理者制度が導入されましたが、それは経営効率を上げるためという目的と、いい作品を創るためにという目的があったように思うのですが、実際には貸し劇場と変わらない運営をしていて民営圧

迫をしようとしています。税金を投入されていて、どうして民間と同じ経営をしていく必要があるのでしょうか。公共のホールにしか出来ない「価値」を持つことを優先するべきではないでしょうか。経営効率を上げるには、無駄な出費を抑え節約をしてやっていくことであり、自分たちの役人仕事のあり方を変えることでしかありません。そうしたことを、自分たち自身からきちんとやっていけば、それが演劇にとっても、日本の社会にとってもく力>になっていくはずですよ。

実際には天下り先になっているのが現状なので、その人たちが一からスタッフや照明の仕事覚えたりすることはカッツイのでしょう。しかしそれを怠慢と言わずに何と云うのでしょうか。

家賃や人件費を支払わなくてもいい上に、自治体の劇場を対象とした基金も複数作られていて、どうして赤字が出るのでしょうか。そしてそこで民間の劇場が競争することが、本当に正しいことなのでしょうか。僕は、公共の劇場は赤字でもいいのではないかと考えています。無駄遣いをするのではなく、いい作品を創ろうと切磋琢磨することに労力を費やすならば、赤字でもいいのではないのでしょうか。それならば例えば税金がかかっても、文句は言われないでしょう。

麻布die prätzeの閉館である今年末まで、まだ時間があります。今のところ、どうなるかは全く見えていません。誰かいい方策があったら教えてもらえないのでしょうか。die prätze／真壁茂夫

独自のげんこつ喜劇に『失神』必至。

げんこつ団『失神』
5月18日(金)～20日(日)
◎新宿タイニイアリス

5/18(金) 19:00
5/19(土) 14:00&19:00
5/20(日) 13:00&18:00
☆料金=3000円均一 ☆お問い合わせ=Tel:03-6759-3740 e-mail:office@genkotu-dan.com

『失神』は、独自の喜劇を展開する、げんこつ団の最新作。

げんこつ団は、都内劇場に暗躍する喜劇団。1990年の設立以降、役者の個性を売りにしない内容重視のスタンスを取り、観客に媚びる演出や演技も一切なしの、孤高の頑固さを貫き通す。また活動開始当初より映像を多様し、作り込まれた作品を発表。その突き抜けた諷刺と黒い笑いには定評あり。作・演出・出演とも全てが女性というのも特色の一つだが、

そんな事は忘れてしまう程にアクの強いシーンが次々と繰り広げられる。

今回『失神』に限らず、げんこつ団における登場人物は、その作中の、現実社会と似て非なる状況や、或いは飛び抜けて馬鹿馬鹿しい状況の中、それでもそれが当然のように至極真面目に生きる。その恐ろしい状況も悲しい状況も無意味な状況も全てが喜劇。登場人物1人1人よりも、その状況や彼等の固定概念こそが、げんこつ喜劇の主役である。

『失神』は、そんなげんこつ団の手法により、失神する程のあらゆる極限状態と、それに翻弄される様、順応する様を描く。そこには、こちらの主張も作品によって伝えたいものも、潔い程に一切皆無。ただ闇雲に、観る者の固定概念を揺さぶり破壊する。

家族、親子、企業、仕事、身分、規則、犯罪、趣味、恋愛、医療、教育、他諸々、またその連鎖。現実社会のあらゆるモノが題材。そのシーン数20以上、映像数10以上。その馬鹿馬鹿しさとくだらなさ最高級品。『気軽な自殺、無害な殺人鬼、人に優しいは

アジア各都市をネットワークで繋ぐ新宿の小劇場
TINY ALICE より最新ニュース

ずのエコ。数限り無く成り立つ仕事に、全てが虚構のオフエス街。さあ、役割で成り立つ家族は、抽象芸術で愛を語れるか。

自立を妨げる現実には、誰もが愛する素敵なメルヘン。人は誰でもそれぞれに、人生という旅に出る。目指せ、最果ての公共機関。見よ、彼等の正義の采配。ところで演劇には他に、こんなものもご紹介します。お好きなものは、ごさいしょうか?

演じるは、様々な老若男女を演じ分ける美しくも変幻自在の役者達。誰がどの配役だったかなど、観終わった後でも把握出来まい。また観ている最中とて、誰がどれだか把握出来まい。その早変わりも見どころの一つ。織り込まれる映像と独自の音楽もまた要体験。げんこつ喜劇は世界一の喜劇。まだの方はお早めに!



「いま演劇することの意味」を問い直す作品が登場。～die prätze M.S.A.コレクションより

ノイ企画『ヴォイツェック/トラウマ』 4/27…19:30 *アフタートーク有り
4/28…15:30&19:30 4/29…14:30&18:30 4/30…14:30
@麻布ディプラッツ前売2500円、当日3000円(学生は500円引き) 問合せ先=090-6523-4386 ☆作/ハイナー・ミュラー/ゲオルグ・ビュヒナー ☆構成・演出/中野志朗

★ノイ企画 中野志朗氏にインタビュー
Q—なぜこの企画に参加されようと思ったのですか?
A—ビュヒナーの「ヴォイツェック」自体は、一昨年スタジオ公演という形で演出したのですが、その時の感触で、この作品はもともと未完の断片しか残されていないという事実はあるものの、いわゆる「物語演劇」とは違う位相のアプローチも可能なのではないかと、むしろ「物語」から開放されることで見えてくるものがあるのではないかと感じていました。そこへ去年の夏でしたが、MSAコレクション参加のお誘いをいただき、ではこの予感のようなものに形を与えてみようと思えました。私は普段はリアリズム基調のストレートプレイを手がける劇団に所属していますし、またそこで育てていただいたこともあり、自分の演劇的出自は、今な

おそこにあると思っています。しかしそれを一度「解体」する作業も必要なのではなからうかと思ひ始め、この企画をそのチャンスにしようと思いました。
Q—今回の作品についてお聞かせ下さい。
A—まず元になっている「ヴォイツェック」に関してですが、私は主人公ヴォイツェックに、世界から徹底的に隔絶された「単独者の眼差し」を強烈に感じます。人間は徹底的な孤立地点に立つことによって、ようやく物事の本質が見えてくるということがあるのではないのでしょうか。ビュヒナーがヴォイツェックの眼差しを通してあぶり出してみせた19世紀後半のヨーロッパが、この「(オリジナル)ヴォイツェック」には描かれているのですが、今回の試みはハイナー・ミュラーという「マシーン」を媒介にすることで、われわれの生きる21世

新しい演劇を発信する神楽坂と麻布の小劇場
DIE PRATZE より最新ニュース

紀の東京とこの「ヴォイツェック」をつなぎ、そこから見えてくるものを顕在化させることです。ミュラーにも、世界/歴史を見通そうとする強烈な眼差しを感じます。ミュラーは、ドイツで権威のあるビュヒナー賞を受賞した際の、自分の記念講演の草稿をもとに「ヴォイツェック/トラウマ」なるテキストを発表しています。ここにはヨーロッパ近代が抑圧してきたもの全ての表象として「ヴォイツェック」がとらえられており、テキストは、ヨーロッパのトラウマを呼び起こす想起の場となっています。この想起の場としてのテキストを媒介に、「ヴォイツェック」をわれわれの「今/ここ」を探る道具にしていきたく考えています。

Q—舞台をご覧になる皆様へひと言おねがいします。
A—私にとって今回は(稽古の進め方含め)まったく新しい試みです。この試みが新たな演劇的地平を切り開くことを願ひ、出演者、スタッフ一同、稽古に邁進して参ります。劇場にて観客の皆様とお会いできることを楽しみにしております。



稽古場の会(神奈川)『深く鮮やかな闇～ブレヒト「処置」をめぐって』
5/5(祝・土)&6(日) 全日18:30 @神楽坂ディプラッツ
前売2000円、当日2500円(学生は500円引き) 問合せ先=03-3235-7990(神楽坂die prätze)
☆構成・演出/横山歩

★稽古場の会 横山歩氏インタビュー
Q—まず稽古場の会についてお聞かせ下さい。
A—8年前程に私が神楽坂ディプラッツでブレヒトの『処置』を上演するために、何か上演主体のようなものをでっかあげなきゃならぬと作れないと言うことで便宜的に付けた名前です。当時はwebで検索しても「稽古場の会」という名前前のカンパニーはありませんでしたので、名乗ったままで。今回MSAにたまたまお声をかけていただいたので、また便宜的に付けてみました。
Q—今回のMSA参加作品「深く鮮やかな闇～ブレヒト「処置」をめぐって」について具体的にお聞かせいただけますか。
A—せっかく演劇公演をやってみてはとお声をかけ

て頂いたので、以前もここで上演した『処置』を今つぎあいのある俳優たちと作ってみようかという気になり、自分なりに構成を加えて上演します。『処置』という戯曲はソビエト共産党の細胞が扇動者として中国の奉天にアジェンションに行くという内容の劇で、様々な意味を含んでいる作品です。
今回の上演にあたっては、ニューヨークの演技スタジオで長い間演劇を学び、俳優活動の傍ら演出助手などでも活躍している高木陽子、桐朋学園を卒業後木冬社に参加し、いまはフリーで俳優や演出を手掛け、楽器も巧みに演奏するまつい綾、メガロシアターというパフォーマンスグループ等で、演劇・ダンスなどジャンルを選ばない個性的な俳優松崎淳、演劇のみならず、映像でも数多くキャリアを広げている高山昌三を出

演者に迎えることができました。また、音楽には気鋭の作曲家港大尋さんにご参加頂けることになり、今からどんなできばえになるか作り手としても楽しみにしているところです。

Q—見どころなど、出来ましたらお話しいただけますか。
A—とりあえず、美しさとか爆笑とか感涙とかそのような領域にはあまり才能と技術が無いため、期待しないで頂きたい(笑)。そのかわり、それとは別の演劇の楽しみにこだわって作ってみたいと思っています。なお、ここに掲載されている写真は、胡屋十字路からゲートを望んだ、いわゆるコザ・ゲート通りです。1970年の12月にここで大きな本当の市民暴動があり、その人々は写真のつきあたりにある第二ゲートから基地内にまで入り込み、数多くの黄ナンバーの車両を焼きました。多分そのことに触れる作品になることは間違いないと思います。では当日神楽坂ディプラッツで…(横山歩)



春の野毛山を舞台にアートイベントが開催。 『坂のはるまつり』に注目。

昨年、横浜野毛山にオープンしたアートプラットフォーム『急な坂スタジオ』主催のアートイベントが来る4月の21、22日に開催される。スタジオだけではなく近隣の文化施設をも舞台にしたユニークなプログラムに注目だ。

図書館、青少年のフリースペース、演劇やダンスのスタジオ、動物園…「急な坂」の途中には、知的・好奇心をくすぐるさまざまな施設が立ち並んでいます。これらの文化スポットを、フリーマーケットの開催やオープンカフェ、ワークショップなどによりゆるやかにつなげ、「のげやま」に足を運んだ人たちがその魅力を楽しみ、共に盛り上げる「坂のはるまつり」。お花見感覚で、「さかみち」を彩るさまざまな仕掛けをお楽しみください！

◎パーク・マーケット

【日時】…4月21日(土)、22日(日)10:00~15:00
【場所】…急な坂スタジオ駐車場、野毛山荘エントランス フリーマーケット・スペース20ブース程度を予定
→急な坂スタジオの駐車場を開放し、フリーマーケットを開催します。野毛・桜木町界隈の人たちが集いリサイクル品などを販売するコミュニティ・ブースをはじめ、急な坂スタジオで作品をつくらせているアーティストも、フリーマーケットに続々参加！何が飛び出すかわからないパーク・マーケットに、ぜひご参加ください！

*出店者大募集中!! 出店に関する詳細は、こちらをご覧ください。
http://kyunasaka.jp/projects/project_archive/parkmarket/

◎急な坂スタジオ 内覧会

～チェルフィッチュ作品の裏舞台～
【日時】…4月21日(土)、22日(日)
15:00～(30分程度を予定)
【場所】…急な坂スタジオ
【参加費】…無料

→急な坂スタジオ、レジデント・アーティストである岡田利規主宰のチェルフィッチュ。舞台芸術のアンテナフェスティバルとも称される、ベルギーのクンステンフェスティバル2007へ招待された「三月の5日間」、初の海外公演を目前に控えた稽古の様子を公開します。お見逃しなく！

◎わくわくわーくしよぶ

『動物さがしで絵を描こう!』
【日時】…4月21日(土)、22日(日) 13:00~15:00ころ(予定)
【場所】…野毛山動物園
【対象】…親子連れからお年寄りまで
【アドバイザー】…永岡大輔(アーティスト)
【参加費】…500円(材料費込み) / 要予約
【予約・お問合せ】045-250-5388
→動物とアーティストといっしょに、春のお絵描きを楽しみませんか? わくわくわーくしよぶでは、動物の生活環境のお話を動物園飼育係の方から聞いて、「動物のものがたり」を想像して絵に

描きます。アーティストの永岡大輔が、イメージづくりをお手伝い。春のお散歩ついでにお気軽にご参加ください！

◎急な坂スタジオ マンスリーアートカフェvol.5『あなたのまちの、アートの仕掛け?』

【日時】…4月21日(土)カフェオープン19:00~
トーク開始19:30~
【場所】…急な坂スタジオ
【ゲスト】…大坂豊(野毛山動物園 元園長)、長倉かすみ(よこはま動物園ズーラシア エデュケーター)、永岡大輔(アーティスト)
【参加費】…1000円(ドリンク付き) / 要予約
【予約・お問合せ】045-250-5388

→よこはま動物園ズーラシアでの、アーティストと動物の出会いが生み出したユニークな取り組みを紹介すると共に、地域の文化資源とアートの出会いをテーマとして、「のげやま」の街の魅力とその可能性を探ります。今回のマンスリーアートカフェは、「動物とアート」がテーマです。

イベントの詳しい内容については、急な坂スタジオのホームページもご参照ください。
http://kyunasaka.jp/projects/project_archive/harumatsuri/
■『坂のはるまつり』
■主催/急な坂スタジオ ■協力/横浜市中央図書館、横浜市青少年センター(ふりーふらっと野毛山)、老人福祉センター横浜市野毛山荘、野毛山動物園

TINY ALICE / NPO ARC

新宿区新宿2-13-6 光亜ビルB1 tel&fax 03-3354-7307
<http://www.tinyalice.net> tokyo@tinyalice.ne.jp

4月12日(木)~15(金) ■SAN sukai
『GOOD DOCTER』問=Tel:03-3984-5019
☆作=N・S ☆演出=藤田あつこ ☆出演=和達真樹 赤木由紀 菊地寿 今成紗沙 平野望 神昌彦 石川香織 原寛 渡辺貴也 藤田あつこ ◎去年8月に旗揚げし、今回で3回目の公演をむかえる事ができました。コメディ、サスペンスといるいるなジャンルで公演をしていきます。今回はオムニバスで、9つのストーリーを10名の役者が何役もこなしていきます。
4月18日(水)~22日(日) ■別世界カンパニー
『リペラウィルス』問=Tel:080-5031-3357
☆作・演出=伊木輔 ☆出演=小川曜子 佐々木葉子 尾形辰巳雅子 谷口典子 三好健太郎 朝日貴之 井上瞳 神谷美帆 土田ひろ 中尾万梨子 林昭宏 ◎別世界カンパニーは旗揚げ以前、無料公演を重ね、役者と劇団のかたちを向上させてきた、若手の実力派集団です。多くの種類の公演を行い、初演から全演出を手掛けてきた伊木輔のオリジナル作品が今、注目されています。
4月24日(火) ■TAICHI-KIKAKU
『金色の魚〜輪廻〜』問=Tel:03-5385-9137
☆テーマ・演出=モリムラ ルミコ ☆出演=オオハシヨースケ ヨシダ朝 モリムラルミコ ◎日本のパフォーマンズグループTAICHI-KIKAKUが生み出した世界(06年までに21カ国で公演)で通用する「言葉を越えた演劇」-身体詩-。タイニアルイスの協力で一年を通じて創り上げていきます。
4月26日(木)~29日(日) ■渡辺センター
『女の日記 ~幸子のしあわせ~』問=Tel:090-6487-8994
☆作・演出=山本浩子 ☆出演者=中秋美幸 関大輔 尾崎歌子 鈴木知子(浜虎) 遠藤童子(かるめ屋) 金田直子(ちいむinugui) 高坂雄貴(いとまほるば) 二面由希 服部弘敏(IDENTITIEZ) 長谷川幸平(IDENTITIEZ) 他一名 ◎2003年タイニアルイスで初演の「女の日記」、それから4年目、満を持しての再演は、エロや馬鹿だけでなく渡辺センターのデリケート部分といえる大事な一作です。
5月4日(金)~5月6日(日) ■E.G.WORLD 協
『HIGH RISK,LOW RETURN.~楽しむ! 極める! 異なる! 魅せる!』問=Tel:03-3361-9758 ☆作・演出=金堂修一 ☆出演=出口恵子 鹿野浩明 川村大輪 花松優 ニーナ・B・ティグ、他 ◎映画「どついたらねん」の製作を担当した金堂修一の主宰。映画『黒い星』『刺青監』の和田聰宏も出身。もっとへびに! もっとハードに! もっとストロングに!
5月10日(木)~14日(月) ■オッセルズ

『SHAKE~あんまり激しく揺さぶるもんだから~』 問=Tel:070-6984-8326

☆作・演出=河野真子 ☆出演=ヤナカケイスケ 武子太郎 盛島仁 生野和人 細野今日子(カカフカカ企画) 二宮則子(カカフカカ企画) カミナリトシヤ 大橋亘(テアトル・ド・ポッシュ) 成田昭仁 竹元修平 神尾あかり ◎前回の旗揚げ公演でチケット完売という偉業を成し遂げたエンターテインメント演劇ユニット“オッセルズ”がアリス初登場。

神楽坂 die pratzte

〒162-0812 新宿区西五軒町2-12 T&F 03-3235-7990

★★★★★ die pratzte M.S.A. collection 2007 ★★★★★★
何かの病原菌に犯される錯覚に陥ってしまいそうな先進的で衝撃的な die pratzte 芸術祭

■会場:神楽坂 die pratzte 03-3235-7990
〒162-0812 新宿区西五軒町2-12
麻布 die pratzte 03-5545-1385
〒106-0044 港区東麻布1-26-6-2F
フェスティバル通し券(1演目につき1回有効 die pratzteのみで予約受付)一般¥6000 学生¥5000(要学生証)
■チケット取り扱い:チケットぴあ 0570-02-9999
■予約・問合せ:神楽坂 die pratzte 03-3235-7990 (火曜定休 12:30~17:30)麻布 die pratzte 03-5545-1385 (月曜定休 18:00~23:00)pratzte@ask.ne.jp

4月30日(月・祝) ■I T
『若淵演出作品上映と朗読―(マハゴニー市の興亡)を中心に』
問=03-3235-7990(神楽坂die pratzte)
☆構成・演出=若淵達治 ☆出演=冨田正久 他
◎B・プレヒト、H・ミュラーの翻訳で知られる若淵達治が演出したプレヒト「マハゴニー市の興亡」を中心に上映、プレヒト劇と音楽の関係、そしてまた上演する為に決して忘れてはならないことを御開帳。上映、自身による解説の後、朗読と質疑応答からなる精神のリリース、そのパトンはどこへ行くのか。
5月2日(水)&5月3日(木・祝) ■M.M.S.T
『HM』 問=050-7558-2195
☆演出・照明・音響=瀬川秀 出演=大崎美穂、伊藤恵、他
◎98年より東京にて活動開始。「現代における演劇の確立」をコンセプトに作品を創作。古典から現代に至る様々なテキストと、それに伴う身体世界の確立に取り組み、独自の空間造形により新しい世界感を構築。主宰・演出の百瀬は舞台作品のみならずサウンドパフォーマンスや映像インスタレーションにおいても意欲的に作品を発表。今回は、H・ミュラーの戯曲からテキストを断片的に抽出し、現代で上演可能な方法論を探るべく、再構築を試み

る。主にH・ミュラーという一人の作家の思想に着目して行う。
5月5日(土・祝)&5月6日(日) ■稽古場の会(神奈川)
『深く鮮やかな闇〜プレヒト「処置」をめぐって』 問=03-3235-7990(神楽坂die pratzte)
☆構成・演出=横山歩 ☆出演=高木陽子、他
◎…そのまに聞いてもらいたいことがある。我々は若い仲間を殺して来た。(プレヒト「処置」) 一人の仲間を殺して帰ってきた共産主義運動の扇動担当者(アジテーター)たち。今どき共産主義も扇動も人殺しもそう簡単にはできないだろうけれど、かつてどうやらそういう時代があったらしい。プレヒト「処置」を殺して帰ってきた復讐の沖繩を舞台にしたシンプルな芝居を私の言葉で上演。是非御覧ください。(文責/横山歩)

麻布 die pratzte

〒106-0044 港区東麻布1-26-6-2F T & F 03-5545-1385

4月7日(土)~9日(月) ■マキガミックテアトリック
超歌唱オペラ『チャクルパ3/ウルルン、ソナタ』宇宙語の旅
問=0465-63-0578(巻上オフィス)
☆作・演出・音楽=巻上公一 ☆出演=巻上公一 磯野曜子 檜山ゆうこ 栗林久美子 菊川真紀 太田収紀 他
◎ヴォイスパフォーマンスとライブアートインスタレーション。エレクトリックな音響のリピートと詩人の言葉によって構成するマキガミックテアトリックの第5回公演。声の音響で繰る一時間
4月24(火)&25(水) ■shelf prd.
『規定されたテキストの断片を巡る2、3の作品—shelf 新作へ向けてのワーク・イン・プログレス、他—』問=http://theatre-shelf.org/
◎shelf 新作へ向けたワーク・イン・プログレスを行います。作品は4月中旬に名古屋・東京で実施予定のワークショップを通じて制作。shelf作品の他にも、パフォーマンス・寂光根際陽の父氏(双身機関・名古屋)等ゲスト参加者を迎え、それぞれが共通のテーマで制作した小品を発表予定。終演後は参加者同士、毎回トーク・セッションを行います。詳細は漸次、shelf公式サイト<http://theatre-shelf.org/>にて発表。なお、ワークショップ参加者もまだまだ募集しています。詳細はE-mailまで、お気軽にお問合せ下さい。
※4/24(火)&4/25(水)に予定されていた「普通劇場」の公演は、参加団体側の都合により中止となりました。
4/27(金)~30(月・祝) ■ノイ企画
『ヴォイツェック/トラウマ』 問=090-6523-4386
構成・演出=中野志朗 出演=田崎哲也、林田一高、梶谷裕、亀田ヨウコ、他
◎19世紀初頭にビュヒナーが見たヨーロッパの風景と、21世紀初頭のわねわねが見る現代都市トウキョウの風景。都市において権力はいかにして現象するの。トラウマはいかにして顕在化し、また解放への転機となりうるの。ビュヒナーのテキストをミュラーを仲立ちにわねわねと合わせ鏡にし、わねわねの「今/ここ」を探る。